



TITLE:

骨關節結核ノ治療法 (其一)

AUTHOR(S):

伊藤, 弘

CITATION:

伊藤, 弘. 骨關節結核ノ治療法 (其一). 日本外科宝函 1926, 3(4): 867-873

ISSUE DATE:

1926-07-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/199982>

RIGHT:

臨 床

骨關節結核ノ治療法（其二）

京都帝國大學教授

伊 藤 弘

結核症ハ人類ノ大敵ニシテ醫學ノ各科ニ亘リテ最多數ノ犧牲者ヲ供シツ、アリト雖、醫學ノ隆運、研究ノ精緻今日ノ如クニシテ吾人ハ尙未ダ結核病原物ヲ剿滅スルニ有力ナル製劑アルヲ知ラズ、顧レバ既往數十年間、學說上並ニ動物試驗上ニハ確實ナル特効アリト目セラル、製劑ノ提供セラレテ社會幾百萬ノ病者ヲ驚喜セシメシコト一再ニ止ラザリシモ、臨牀上ノ實驗ハ數年ヲ出デズシテ常ニ失望ノ嘆聲ヲ以テ終ルヲ常トセリ。

況ンヤ學說上ニ於テモ亦動物試驗上ニ於テモ何等ノ根據ヲ有セザル結核治療劑ニ於テハ其效果ノ程モ推知スルニ餘リアリ、然ルニ實際上社會ニ結核治療劑トシテ提供セラレツ、アル製劑ハ實ニ莫大ナル數ニシテ一々枚舉ニ遑アラズ、而カモ或ル種ノモノハ其販路モ相等廣ク、患者モ亦治療ニ効果アリト信ジテ之ヲ使用スルハ其原因果シテ奈邊ニ存在スルゾ。即チ一ツハ販賣者ノ巧妙ナル誇大ノ廣告ト一ツハ世界各國特ニ東洋民族ハ古來ヨリ習慣的ニ治療上ニ對スル藥劑ノ効果ニ就テ過信ヲ有スル結果ニ外ナラズ、尙一ツ重大ナル原因ハ結核ハ自然治療ヲ行ヒ得ル可能性ヲ有スル疾患ナルヲ以テ患者自己ノ肉體ガ結核症ニ打勝チテ治癒シタルモノヲモ藥劑ノ効果ナリト誤信スルモノ多々アリ、人間ニハ斯カル弱點ヲ有スルヲ以テ恫智ニ富メル輩ハ之ヲ利用シ種々ナル結核特効藥ナル名稱ヲ冠符シ巨利ヲ貪ラント欲スルモノアルヲ以テ注意ヲ要スル所ナリ。

凡ソ藥劑ナルモノハ二、三ノ例外ヲ除キテハ一般ニ疾病其物ニ對シテ直接ニ作用シ之レヲ根元ヨリ撲滅スルノ作用ヲ有

スルモノニ非ラズシテ唯對症のニ幾分其効果ヲ期待シ得ラル、ト雖、多クノ場合藥劑ハ又危險ナル副作用ヲ有スルノミナラズ、是ニ由リ一定ノ狀態ニ停止セル疾患ニ對シテ或種ノ症候ヲ變化シ或ハ之ヲ除去シ、爲メニ病型ヲ攪亂スルヲ以テ醫師ハ疾患ノ狀態ニ對スル標準ヲ失ヒ、患者ハ自然治癒ノ目的ニ對シテ損失ヲ蒙ルコトアリ、而シテ疾病其物ノ治癒ハ肉體ト疾病トノ鬭爭ノ結果、肉體ガ疾病ニ戰勝シタル場合ニシテ治癒能力ハ全ク肉體ニ存スルモノナリ、故ニ藥劑ノ使用ノ目的ハ唯肉體ト疾病トノ鬭爭ニ當リテ肉體ニ援助ヲ與フルモノト理解スルガ最モ適當トス、惟フニ將來ノ治療醫學ハ醫術ノ何レノ方面ニ向ツテモ能フ限り投藥ヲ避クルヲ以テ醫家ノ義務トナシ、吾人ノ理想トナス可キヲ教ユルノ日ナカル可カラズ。

結核症ガ良ク自然治癒ヲ營ミ得ラル、コトハ幾多ノ病理解剖學の所見ノ教ユル所ニシテ他種疾患又ハ不慮ノ災禍ニヨリ急死シタル屍體ノ剖檢上非常ノ多數ニ於テ治癒肺結核ノ殘骸トシテ屢々肺炎ニ乾酪竈或ハ石灰沈著或ハ包埋スル結核菌ヲ有シ或ハ之ヲ有セザル結締組織硬變ヲ發見スルノ事實ハ浩翰ナル統計ノ之ヲ證スル所ナリ、此等ノ多數ハ生前自カラ肺結核ノ自體ニ存スルコトヲ知ラズ隨ツテ何等肺結核ノ醫療ヲ受ケザリシノミナラズ或ハ衛生上非常ニ不良ナル生活法ヲ送りシ者スラ少カラザリシトセバ吾人ハ此ノ病理解剖上ノ立證ヨリシテ肺結核ハ醫療ヲ要セザルモ個體ノ自然治癒力ニヨリ治癒ノ容易ナル疾患ナリトノ重要ナル事實ヲ認メザル可カラズ。

夫レ既ニ不良ナル衛生狀態ニアル者ニスラ或ハ何等ノ醫療ヲ加ヘザル者ニスラ治癒ノ容易ナル一疾患ナリ、況ンヤ醫師ノ慎重ナル監視ト有利ナル治療要約ヲ施スニ及バ、肺結核ノ治癒ハ決シテ至難ノ事實ニ非ラザルナリ。

而シテ結核症ト言ヘバ人直チニ肺結核ヲ想像スルガ如ク、結核症中最大多數ヲ占ムルト雖、骨關節ノ結核モ亦決シテ稀ナルモノニ非ズシテ外科的結核中第一位ヲ占ムルモノニシテ丁度内科領域ニ屬スル肺結核ト相對峙シテ内外兩科ノ結核病ノ雙壁ト云ハザル可カラズ。

骨關節ノ結核タルヤ決シテ特種ノ結核ニ非ラズ、唯發生部位ヲ異ニスルノミナルヲ以テ肺結核ト同様ニ容易ニ治癒シ得

ラル可キ筈ナルニ事實ハ是ニ反シテ其治療頗ル困難ナリ、又病理解剖學的所見ニ於テモ骨特ニ關節結核ノ自然治療ヲ營メル報告ハ極メテ寥々タリ。

斯ノ如ク肺結核ハ寧ロ頗ル自然治療ノ傾向ヲ有スルニ反シテ骨關節ノ結核ハ之ヲ有セザルハ、ソモ其原因ハ何處ニ存スルゾ。

勿論骨關節ノ結核ト雖、肺結核ト何等異ナルコトナク結核病竈ヲ形成ス、唯異ナル所ハ組織自體ノ相異ト、骨關節ハ個體ノ支柱タルト同時ニ運動器官ナルヲ以テ人ガ生活ヲ存続スル以上、骨關節ハ絶ヘズ體重負擔ヲ免レザルト同時ニ亦局所ノ安靜ヲ保持シ難シ、此ノ體重負擔ト局所ノ安靜困難ガ骨關節ノ結核ヲシテ自然治療ヲ營ムニ大ナル障礙ヲ與フ可キ二大原因タラザル可カラズ。

故ニ骨關節結核ノ治療ノ方針ハ第一ニ結核竈ガ體重負擔ヨリ絶對ニ免除セラル、コト第二ニ結核竈ノ絶對安靜ナリ此ノ二大治療方針ヲ差シ置キテハ如何ニ卓越ナル治療方法モ優秀ナル藥劑モ効ヲ奏シ能ハザルコトヲ推知スルニ難カラズ。

肺結核竈ハ體重負擔ヲ受クルコト無ケレドモ呼吸運動ニヨリテ絶ヘズ局所ノ動搖ヲ免レザルヲ以テ局所ノ安靜ヲ計リテ肺結核ノ自然治療ヲ催進セシムルコトハ既ニ先人ノ着眼セル所ナリ、例ヘバ人工氣胸ヲ形成シテ肺臟ヲ萎縮、安靜セシメ以テ肺結核ノ治療ヲ計レルガ如シ。

然レドモ人ニヨリテハ氣胸構成ヲ以テ肺臟ニ對スル壓迫療法ナリト解スル人アルモ、コハ大ナル誤謬ナリ、何ントナレバ療法ニヨリテ起ル作用ハ本來ノ意義ニ於テ壓迫ニ非ズシテ弛緩ナリ、肺臟ノ伸展力ヲ奪ヒ、其呼吸運動ヲ停止セシムルニアリ、肺臟ヲ眞ニ壓迫センコトハ器械的ニハ多クハ全然不可能ナルノミナラズ、是ニヨリテ肺臟ノ血流ヲ調節スル能ハザルガ故ニ屢々著シキ危害ヲ誘發スルノ恐アリ、故ニ人工氣胸及ビ之ト目的ヲ同ジウスル現時ノ肺臟外科的療法ハ寧ロ「肺臟虛脫安靜療法」ナル名稱ヲ冠セシムルヲ適切ナリトス。

該方法ニハ胸廓ノ外形ヲ變化セシメズシテ肺臟ヲ胸廓壁ヨリ隔離セシムル方法ト胸廓壁ニ成形の手術ヲ行ヒ肺臟ニ同

上ノ結果ヲ誘致スル方法トアリ、而シテ前者ノ方法トシテハ兩肋膜間ニ瓦斯ヲ送入シ、部分的或ハ全肺ノ萎縮安靜ヲ企圖スル所謂人工氣胸構成法及ビ胸壁ヨリ肺臟ヲ剝離シ固形物質ヲ以テ其空間ヲ埋沒スル方法等アリ又最近ニ至リテ橫隔膜神經切除術 (Pneumotomie) ニヨル橫隔膜麻痺ニヨリ胸腔ヲ狹隘ナラシムル方法等推奨セラル。

斯ノ如ク肺結核ニ於テサヘ其治療ヲシテ良好ナラシムルガ爲メニ肺結核竈ノ安靜法ヲ企圖セラレタルヲ以テ一般結核症ニ對シテ局所ノ絕對安靜ト負擔輕減ガ治療ニ對シテ肝要ナルカヲ窺知スルニ難カラズ。

然リト雖骨關節結核モ其結核症自體ハ肺結核ト何等異ナル所ナキヲ以テ一般結核ニ對スル治療ヲ要スルコト亦言フ俟タズ。

上述ノ如ク結核病竈ニ於ケル結核菌ヲ一舉撲滅スルガ如キ有力ナル方法ハ現存尙絕對ニ存セザルニ反シテ肺臟ニ於ケル結核病竈ガ自然治癒ニ依リ治癒スルノ實證ハ頗ル確實ナルヲ以テ、醫療ノ目的ハ此ノ自然ノ妙機ヲ利用シ、之ヲ補助シテ治癒ヲ催進スルノ外ナキヤ勿論ナリ、然ラバ治療原則ハ專ラ此自然治癒ノ原理ニ準據スルモノタラザル可カラズ。

然ラバ自然治癒ノ原理トハ果シテ何ヲ意味スルヤト問ハ、吾人ハ等シク一般個體ヲ強健ニシ結核ニ對スル抵抗力ヲ増強セシメ局所組織ニ於ケル自然ノ治癒活力ヲ十分ニ發展セシムルモノト答ヘザル可カラズ。

結核菌ノ發見以來其病原體ヲ病竈ニ於テ一舉剿滅セントスル學者ノ努力ト忍耐トハ實ニ他種疾患ノ研究ニ其比ヲ見ザル迄ニ熱烈ヲ極メタリシモ、悲哉此目的ハ結核症ニアリテ終ニ達スル能ハザリキ、否吾人ハ將來ト雖モ恐ラク之ガ目的ヲ貫徹スルコト頗ル困難ナリト信ズ、何ントナレバ結核病變ハ他種傳染病ト大ニ其ノ趣ヲ異ニスルノ點ハ、其嚴正ナル意義ニ於テ限局的病變ニシテ全身病ニ非ラズ、身體ノ一隅ニ於テ血管ニ乏シキ病竈ニ籠居シ動モスレバ結締組織ノ牆壁ヲ生ジテ自己ヲ圍繞スルヲ以テ抗毒製劑ナル結核血清ノミニ止ラズ假リニ抗菌作用ヲ有スル製劑アリトスルモ之ガ病原菌ニ直接作用シテ之ヲ撲滅スルコトノ如何ニ困難ナルカハ容易ニ理解シ得ラル、所ナリ、試ニ思ヘ徵毒ハ著明ナル一種ノ全身性傳染病ナリ、故ニ病原體ニ對スル特殊ノ毒物タル水銀劑或ハ亞砒酸劑ニヨリテ一舉シテ之ヲ撲滅スルコト難シトセズ、是ニ

反シテ淋疾ハ著明ナル一種ノ局所性傳染病ニシテ屢々血液及淋巴流ノ灌流僅少ナル粘膜組織ノ上層ニ籠居シ、慢性ノ疾患ヲ爲ス、故ニ其隔壁ヲ打破シテ菌體ヲ剿滅センコトハ頗ル難事トセザル可カラズ、而シテ此意味ニ於テ結核病變ハ全然微毒病變ト異ニシテ寧ロ大ニ淋菌病變ニ類スルモノト云フ可シ。

而シテ從來結核症ノ治療法トシテ行ハル、モノハ藥劑療法、化學療法、「ツベルクリン」療法、全身療法、理學的療法、觀血療法及ビ整形外科的特種固定法等ナリ、以下順次此等ノ方法ノ概略ヲ述ベテ批判ヲ試ミント欲ス。

藥劑療法

結核症ニ効果アリトシテ市井ニ提供セラレツ、アル藥品ハ其數實ニ無限ニ達シテ一々枚舉ニ遑アラズ、斯ノ如ク多數ノ製劑ガ提供セラル、コトハ亦一面ヨリ考察スル時ハ其等ノ製劑ガ結核症ニ對シテ效果無キコトヲ立證スルモノナリ、然リト雖吾人ハ之ヲ臨牀上ノ經驗ニ徵スルニ結核症ノ經過ガ藥劑ニヨリテ屢々良好ニ影響セラル、コトアルハ又蔽フ可カラザル事實ナリ、然ラバ藥劑ナルモノハ果シテ結核個體ニ對シテ如何ナル作用ヲ及ボスモノナルカ、換言スレバ學理上ニ於ケル藥劑療法ノ眞ノ目的ハ抑モ奈邊ニ存在スルゾ。

而シテ其藥劑ハ無數ナリト雖凡ソ之ヲ大別スル時ハ「クレオソート」屬製劑、「イヒチオール」屬製劑、「ヘトール」及其類劑、亞硫酸類劑、燐屬製劑、水銀劑、「カルシウム」鹽劑、茺菁酸加里及那篤倫及ビ樟腦劑等ニ一括セラル。而シテ此等ノ藥劑ハタトヘ試験管内ニ於テハ結核菌ノ發育ヲ停止シ或ハ之ヲ撲滅シ得ルト雖體內ニ於テ之ヲ撲滅センコトハ頗ル難事中ノ難事タリ、何ントナレバ凡ソ藥劑ナルモノハ内用ニヨル腸管吸收力又ハ注射ニヨル皮下組織ノ吸收ニヨリテ體內ニ受入スルヲ以テ體內ニ於テハ著シク稀釋セラル、ヲ以テ個體ノ總血量ニ於ケル比ガ果シテ試験管内ニ同一藥劑ヲ混ジ結核菌ノ發育ヲ阻止シ得タル比率以上ニ達セシムルコトハ頗ル困難ナルコトニシテ、タトヘ達セシメ得タリト假定スルモ是ニヨリテ結核個體ノ血液中ニ遊離セル結核菌ニ作用シ、之ヲ殺滅スルカ或ハ全々無害ノモノト變性セシメ得タリトスルモ、是ニヨリテ結締織ノ障壁ヲ圍繞シ、甚シク血液及淋巴液ノ交流ヲ阻止セラレツ、アル結核病竈ニ於テ、蝟集シテ個體ノ病

機ヲ左右セル猛烈ナル病原物ノ巢窟ヲ剿滅センコトハ頗ル困難ニシテ是ニヨリテ菌ノ發育ヲ阻止シ毒力ヲ減弱セシメンコトモ亦均シク不可能ノ事ニ屬ス、試ニ見ヨ吾人ノ平常目睹シ得ル初期ノ限局セル外科的結核病竈ニアリテスラ此ノ可能ヲ證明スル能ハザルニ非ズヤ、況ンヤ此ノ目的ニ個體內ニ輸入セラル、斯カル巨量ノ藥劑ハ其副作用ニヨリ反ツテ個體ニ多クノ危害ヲ及サバレバ止マザルニ於テヲヤ、願クバ實地醫家タルモノハ此ノ觀念ヲ悟リシテ坊間ニ販賣セラル、所謂結核特效劑ナル物ノ意義ニ對シテ惑フ無カラシコトヲ。

然ラバ吾人ハ問ハン所謂特效劑ナルモノハ、結核菌ニヨリ形成セラル、毒素ヲ中和シテ個體ニ良好ナル影響ヲ及ボスコトヲ得ルカト、現ニ此希望ノ可能ヲ公言セシ學者乏シカラザレドモ今日迄未ダ實驗上ニモ臨牀上ニモ此ノ假說ヲ證明スルニ足ル何等ノ證左ナシ。

斯ノ如ク藥劑ナルモノガ個體內ノ結核菌撲滅ニモ又結核毒素ノ中和ニモ何等ノ影響ナシトスレバ吾人ハ結局藥劑療法ノ結核症ニ於ケル或ル程度迄ノ奏効ヲ以テ病的個體ノ生理的防禦力、換言スレバ個體ノ抵抗力ヲ昂進セシムル作用ニ歸スル外ナシ、此種ノ藥劑ナルモノガ個體ニ對シテ食欲ヲ催進シ、消化ヲ改善シ、是ニ由リテ結核療法上ニ價值アル一般榮養狀態ノ改善ニ對シ、良好ナル影響ヲ及ボスノ點ニ就テハ殆ド異論ヲ唱フル人無ク、亦タ現時存スル多クノ製劑ニ何レモ多少ノ作用アル可キヤ疑ナシ、是ニ由ツテ之ヲ觀レバ藥劑療法ナルモノハ結核症ニ對シテ單ニ間接的ニ其治効ヲ發展スルモノニシテ其目的タルヤ結局一般榮養療法タルニ過ギズ。

化學療法

化學療法ノ因據ヲ與ヘタルモノハ實ニ微毒ニ於ケル水銀劑、「マラリヤ」ニ於ケル規尼涅劑ノ如ク一二ノ他種傳染病ニ於ケル化學的製劑ノ特殊治効ニアリキ、而シテ此方面ニ關スル熱心ナル研究家相次イデ續出シ、好奇ニ渴スル世界ノ耳目ヲ聳動セルコト再三ニ下ラザルハ人ノ知ル所ナリ、本邦ニ於テモ曰ク古賀液(チアノクプロール)曰ク菅井液(靑酸加里銅復鹽液)曰ク淺原液「フチキユラ」等アリ然レドモ微毒回歸熱、「マラリヤ」、「アメーバ」赤痢等ノ如キ原蟲性傳染病ト各種

ノ病原細菌トハ其體制及構成ヲ異ニスルコト甚シク爲メニ人體内ニ移入シタル藥物ニ對スル抵抗力ニ甚シキ相違アリ、殊ニ病原細菌中其抵抗力ノ最モ著シキ結核菌ハ外界ニアリテスラ些細ナル器械的或ハ化學的刺戟ニヨリ之ヲ撲滅シ能ハザルヲ以テ況ンヤ體內ニ於テハ其目的ヲ到達スルコト殆ンド不可能ナルコトヲ推知スルニ難カラズ。

原生動物體ハ其構造軟弱、其發育法複雜ヲ極メ試驗管内ニ於テモ、能ク一定毒物ノ極メテ微量ヲ以テ比較的短時間ニ之ヲ死滅セシメ得ルモノナリ、故ニ血液中ニ於テモ輸入シタル微量ノ注射藥ヲ以テ屢々一舉之ヲ撲滅シ得可ク、或ハ尠ナクトモ體構造物質中抵抗最モ薄弱ナル部位ヲ容易ニ撲滅シ得可キコトモ亦想像ニ難カラズ、然ルニ植物體ナル細菌ハ大ニ其菌體自己ノ構成ヲ異ニシ強烈ナル外被ヲ以テ保護セラル、故ニ其外被ノ抵抗力ニ抗シテ之ヲ撲滅センニハ依テ當該人體ヲ斃ス以上ノ巨量ノ毒物ヲ以テスルモ尙屢々困難ナリ、若シ夫レ病原細菌類中其抵抗力強靱ニシテ而カモ結締組織ノ牆壁ヲ以テ圍繞セラレタル結核菌群ガ注射藥物ニヨリテ容易ニ撲滅シ得ラル、モノナリト假定スルナレバ、結核菌ヨリ遙ニ藥物ニ對スル抵抗力薄弱ナル細菌ヲ病原トスル他種傳染性疾患ニ於テ一層容易ニ化學療法ハ成功ス可キニ非ズヤ、而カモ吾人ハ現今ニ至ル迄化學療法ノ成功シタル一急性細菌性傳染病アルヲ知ラズ。

近代驅微療法トシテ亞砒酸製劑ナル「サルベルサン」注射ガ特種ノ効果アルコトヲ認メラル、ニ至リテヨリ是ニ一種ノ刺戟ヲ受ケテ結核ニ對シテモ亦根治的化學療法ノ存在スルコトヲ夢ミツ、研究ニ腐心スルモノアリ然レドモ上述ノ如ク他種細菌性疾患ハイザ知ラズ尠ナクトモ結核症ニ對シテ化學療法ノ完成ヲ期スルコトハ難事中ノ難事トナサル可カラズ、而シテ幾多ノ化學療法トシテ發表セラル、モノ、中ニハ、多少ノ効果ヲ認メラル、モノモ存在スルト雖、其效果ノ本態ハ病竈ニ及ボス一種ノ刺戟療法ナルガ如ク、蓋シ藥物療法ノ進歩ニシテ、眞ノ化學療法ノ意義ニ於テ相去ルコト尙甚ダ遠シト云フ可シ。(未完)